

## 各地の暮らしと習慣 ～フェノロジーカレンダー～ 茶話会（2）

5・6月の行事 （まとめ） 6月14日 担当 廣岡昌子

### 1) ★5月1日の八十八夜

立春から数えて88日目では今年5月1日。「八十八夜の別れ霜」、また立夏（5日）が近いので「蛙鳴き始む」とも言われ、気候が落ち着き農家が田植の用意をする目安の時期である。お茶の新芽摘みに最適な時期でもある。八は末広がりで八十八は重ねて書くと米で米寿となり八十八夜のお茶は縁起が良く不老長寿の願いが込められた。

～（私部地区）住吉神社の南から向井田辺りまで茶畑が広がっていた。前川や天の川沿いや、畑の畔にも自家用のお茶が植えられ、新芽を摘む五月初旬頃が一番多忙で、中旬になると二番茶と一番茶の残りで作る「親子茶（番茶）」をお茶漬けにすると美味しかったらしい。交野は奈良の田原や京都方面とのやりとり（婚姻）も多く、その親戚からお茶を貰ったりする家も多かったようだ。また、お祖父さんが京都の和束（お茶の産地）から来ておられるお宅では三台ほど製茶機を据えられ、自家用のみでなく、近隣の家々や倉治からの新茶も製茶され、子供の手も借りて家族総出で製茶をされており、昭和五十年頃まで続いていた。この時期は農繁期で昭和40年頃までは4年制の高校もあり、学校は休校となった。

～（星田地区）星田も農家が多かったので、各家庭で飲む分はお茶の木を栽培されており、子供も「茶摘み」にかりだされ、摘んだ新芽は『中井製茶場』で1、2番茶まで製茶され、その後は各家庭で茎葉を大きな窯で蒸し天日にさらし番茶“とされていた。～

### 2) ★磐船神社・毎月一日には月次祭の神事が行われている。（月次とは「毎月」の意味）

### 3) ★5月5日 端午の節句

これは奈良時代に中国から入った陰陽道の五節句の一つ。何故5月5日かと言うと端午の午は旧暦の5月。端午の端は「はし」＝「始め」の意味で5日。

又 一説には中国の紀元前4Cの春秋戦国時代の楚の政治家で詩人の屈原が、彼が仕える楚の懷王が秦の策略で殺され、屈原は左遷された。彼は「楚辞」に「世を挙げて皆濁れるに吾独り清めり 衆人皆醉えるに吾独り醒めたり 是を以て放たる」と詠い、国の将来に絶望して5月5日(端午)に、べきら江に入水自殺した。この彼の命日が端午の節句の由来と言う説もある。（「漁夫の辞」もある）。皆は彼を救おうとすぐに船を出し探索した。これが現代のドラゴンボート（龍船競艇）の起源。又人々は彼の死を惜しみ命日には川に供養にお餅を流したが、屈原の霊が供養の餅は蛟龍が食べてしまうので、魔除けに楝樹（レンジュ＝せんだん・白檀）の葉で包み、五色の糸で結んで流してほしいと言い、そうしたのが粽の始まりと言う。日本では茅（ちがや）で巻いたので「ちがや巻き」→「ちがまき」→「ちまき」となった。

### ★平安時代には薬玉くすだま

薬草で香りのよい蓬や菖蒲などを切って錦の布で包み、五色の糸で飾ったものを作り人に贈ったり魔除けとして部屋に飾ったりした。（源氏物語や枕草子に出てくる）。

～現在では菖蒲などを使った薬玉は見かけられないが、病院の病室の入口には、今も患者の折り紙による手作りの薬玉が多く見られる。厄除けの願いが込められているらしい。

～（森・私部地区） 酒造家・大門酒造・山野酒造では12月に杉の葉を杉玉にして作り一年中軒に吊している。また、杉は香りが良いので酒樽の材料になる。

#### ★「軒菖蒲」

魔除け、無病息災祈願として、菖蒲と蓬をくくり屋根に置いたり、軒や玄関に吊した。

～（星田）昭和50年頃まで軒下に良く吊るされていた。

#### ★「菖蒲湯」

菖蒲湯も奈良時代に中国から伝来した端午の節句の風習の一つ。雨季の始まりで疫病が流行しやすいので、邪気払いと無病息災を願い菖蒲湯につかる。血行促進作用があると言われ、今に受け継がれている。又、早乙女は5月のお田植をする時に菖蒲で身を清めたという。

～（森・寺・私市・星田等） 交野では、菖蒲湯は今も多くの家で楽しまれている。

#### ★鎌倉～江戸時代

この時代になると屈原の忠君愛国の情が武士社会に受け、菖蒲は尚武、勝風、勝負と掛けられ、葉が劔の形に似ていることもあり、縁起が良いとされ、菖蒲湯に浸かり心身を清め、武運を祈願した。これは町人たちにも広まり、家族全員で菖蒲湯に浸かり無病息災、厄除けを祈願したらしい。

#### ★鯉のぼりの起源

将軍にお世継ぎができると城中に幟を立て槍や武具を飾って祝った。

これが武家家庭にも広まり、男児の健やかな成長を願った。幟が鯉のぼりとなる。何故鯉かと言うと、中国の故事の「鯉 竜門を登りて龍となる」にちなんでいる。鯉が紙で作られるようになり、急に庶民にも広がった。武家は家の中で兜や鎧も飾った。（虫干しの為でもあったという）鯉のぼりに関しては主に関東に広まった。（「東都歳時記」）

～（私部）男の子のいる家は、昔は鯉のぼりは庭に立てる家が多かった。立てるための竹は近くで売っていて真鍮製の物もあった。外は鯉のぼり、家の中では武具鎧兜の段飾りを飾って祝った。粽は家の手作りで笹は川べりで集めて巻いた。

#### 4) ★日本の「こどもの日」と「世界こどもの日」(Universal Children's Day)

日本では世界でも早く、昭和23年、戦後すぐに「国民の祝日に関する法律」で「子供の人格を重んじ、子供の幸福を計ると共に、母に感謝する」日として5月5日を当て、切手が発行された。「世界こどもの日」は1954年（昭和28年）国際連合が「子供たちの相互理解と福祉を増進させる事」を目的として制定した記念日。毎年11月20日。

#### 5) ★5月5日 磐船神社の護摩焚き

磐船神社は「河内国河上哮ヶ峯」（先代旧事本紀）と呼ばれている。

御祭神の饒速日命が天照大御神の詔により天孫降臨された大切な記念の地である。巨石奇岩の岩屋は古来より神道家や修験者の行場で、護摩焚きも神官と行者で行われており、長く社僧が居られたが、明治時代の神仏分離により、神官のみにて行うようになった。社殿が災害で流され、長く寂びれていたが、今の西角宮司様の祖父様が田原の住吉神社の宮司様の協力のもと復興され、親子三代にわたり守っておられる。護摩焚きは今も神官のみで行われる。子供の無事な成長を願い、家族安寧子孫繁栄を願い、護摩木を炎に入れて燃やしながら、人々の穢れを炎で清め、そこに書かれた人々の祈願成就を炎で天に届ける行事である。

## 6) ★5月8日 花祭り（灌仏会）。

お釈迦様の誕生日を祝う仏教行事で子供の健康と成長を願う。お釈迦様が誕生された時に天の神々が甘露の水を祝福として注がれたと言う伝説に由来して、甘茶を誕生仏にかける。

- ～（星田） 光林寺は花の多い5月8日に行う。檀家の人々が花を持ち寄り、花の櫓を作り、お釈迦様の誕生仏に甘茶をかけ、参加者にも振舞われる。
- ～（私部） 光通寺では今も檀家総会を5月8日に行い、お釈迦様に甘茶をかける行事を続けている。釈迦誕生時に九つの頭を持つ龍が天から降りてきて甘露の雨を注いだと言う伝えに由来している。
- ～（森） 獅子窟寺では5月8日は一日中、花祭りを行っていた。  
須弥寺でも同日が花祭り。本堂のお仏壇の横に、小さなお釈迦様が真中に立つ甘茶器が置かれ、参拝人はそれに杓で甘茶をかけて拝礼し、甘茶を戴いて帰る。（最近甘茶が貴重品になってしまい、近くではなかなか入手しにくく、インターネットで購入しておられるらしい。）  
須弥寺は磐船街道から磐船村への道筋にあったので、森、寺、私市から人が集まった。花祭りにも昔は縁日が出て、セルロイドの人形・輪投げ・パチンコ・鉄砲・当てもの・綿菓子などの店が出た。  
くまた12月には本講さん（森 門徒衆）、8月の十日盆（森 観音講）など、季節ごとに縁日が出て、幸を願い、災いを祓って下さるように神仏に祈った。ちなみに須弥寺は江戸時代以前は石清水八幡宮の領寺であったために清水寺（シミズ）と呼ばれていた。＞

## 7) ★ 野崎参り（大東市）

大東市の野崎にある野崎観音（正式名は福聚山・慈眼寺。曹洞宗）は8世紀に行基が十一面観音像を刻み開山された。5月8日はここでも盛大に灌仏会が開かれる。

人々に「野崎さんの八日（ようかび）」と親しまれ、1日から8日まで参道に出店が出て賑やかである。交野からも、特に星田からは交通の便も良く、多くの村人が参った。昔から参道の出店が賑やかで、高野街道の道筋は菜の花盛り。寝屋川を舟で行く人と土手を歩く人が悪口や駆け言葉で遊んだという。平安時代に江口の君が再興した記念の「江口の堂」もあり、婦人病にご利益があると今に至る。浄瑠璃の「新版歌祭文」はお染・久松の実話の心中物で野崎村の段が有名。今中楓溪作の「野崎小唄」などでも親しまれ、各家は竿の先にだんごつつじの花と若松などを括り付け庭先に飾って祝った。寺や私市には野崎講があり講の人が「むねんぎょ」と書いた袋を持って回ってきて、村人はお米やお賽銭などを入れて寄進した。

- ～（私部） 5月8日は「ようかび」と言って近隣の人や土地を離れた人たちが里帰りしてきて、団欒したり、野崎参りをして楽しんだ。

## 8) ★薬師如来の縁日も8日。

～（星田）薬師堂では特に5月8日には「お薬師っさんの日」と言って、畑堂（ハタンド）と呼ぶ薬師堂前の広場で縁日が有った。その広場の真ん中には火の見櫓があり、それを囲むように、陶器、ガラス食器、鶏とひよこ、古着、など多くの店が出て、村人たちで賑わった。

瑠璃光山薬師寺と呼ばれ、ご本尊は薬師如来立像。創建年代は不明だが、1607年にはすでに在った。佐太来迎寺末の大念仏宗であったが、今は浄土宗。薬師如来立像・千体仏は交野市で文化財保管されており、地藏菩薩座像は薬師堂に安置。現在の薬師堂は老朽化で荒廃し、近隣に迷惑とのことで持ち主の知恩院と交野市間で折衝中。以前は5月8日に法要されており、世話方も60名ほどおられた。「畑堂」の呼び名は妙見宮の灯籠の天保11年(1840)にも刻まれている。

## 9) ★倉治・光明院の「御回在」5月14日

融通念仏宗は延暦寺の僧・良忍上人が1127年に鳥羽上皇の勅願で開創された。「回在」は1618年頃から始まり、今に至っている。

河内地区には5月に融通念仏宗の「ご回在」があり、「上人さん」の愛称で呼ばれてい

る。大阪市平野区にある本山「大念仏寺」より紫衣の唱導師、黄衣の目代、黒衣の僧中4名、鉦撞き、御本尊担ぎ、お札配布、奉仕員3名、地元世話人6名が檀信徒の家々を回り、先祖の供養と家内安全、除災与樂を願い、身体堅固を祈禱される。

倉治の光明院では、「お掛かり」はその家でご本尊（十一尊天得阿弥陀如来）の掛軸を御開帳し、唱導師、目代、僧中4名でお勤めし、奉仕員3名、地元6名もお供する。「たてこう」はご本尊を御開帳せず、僧中2名でお勤めし、奉仕員3名、地元世話人で家々を回る。檀信徒は以前は200軒以上おられたが現在は153軒ほどになり、お掛かりは15軒程である。

檀家は各家の仏壇前にご回在のために位牌、御膳、過去帳、仏花、餅、等をしつらえ、ご一行が鉦（かね）を打ち鳴らされる音が響くと、それが「もうすぐ我が家に、、、」の合図となり、『十一尊天得阿弥陀如来』様がお越しになるのを今か今かと待たれると言う。

～私市の「松宝寺」も同じく「ご回在」をしている。

～郡津の「極楽寺」にも「ご回在」がある。大きな掛軸を担いで鉦を鳴らしながら各檀家を回る。

掛軸はこの時は開かれない。子供たちはご回在を「かんかんさん」と呼んで付いて回った。

#### 10) ★川ざらえ・溝ざらえ

各地で日は異なるが5月に男衆が出て、田植前に川から田に水を入れるために、一回目の川ざらえをした。川や溝の雑草を抜き、溜まった泥やごみををさらえ、土手の草を刈り、田代作りや田植前に田に水を入れる。二回目は、「土用干し」した後の田に水を入れるが、その水入れの前に、水の流れを良くするために再度行う川ざらえである。

～（星田）これに参加しないと水利組合に罰金を払わねばならなかった。

～（倉治）道づくり・9月に川ざらえが終わった後、稲刈りの準備で道を草刈清掃する。（明治時代の風習）

#### 11) ★田植の用意（4月中に稲の種粃を撒いて苗を箱で育てる）。

①田起し：トラクターなどで田を掘り起しよく混ぜる作業。

②基肥（もとひ）：田起しの時に、肥料をまいて土と混ぜ合わせる作業。

③水入れ：田に水を入れて水田にする作業。

④畔塗り：水が漏れないように畔に泥を上げて鍬で塗り固める作業。

⑤代掻き（しろか）：水が入った田圃を耕して土を細かく砕き、水深を一定にする。

（昔は牛に長い板を引かせて行っていた。）

⑥植え付け：育苗箱で育てた苗を田んぼに植え付ける作業。手でしっかり土に入れ込まないとプカッと浮いてくる。

（田植には植子さんと呼ばれる、女性の手が必要で、植子さんがモンペ、カスリ姿で田植を手伝う。近くの親戚やご近所が助け合い、「今日は〇〇さん、明日は〇〇さん」と段取り良く順に作業を進めていった。昼食は畔でその家の女子手作りのおにぎり等を食べて、一時の休息を楽しんだ。これが田植の風物詩であった。）

⑦その後は植え付け休み：ご馳走を食べ、休息し、温泉旅行などに行かれた。

⑧草取り：田植の後にはすぐ草が生えてくる。土用干しのころまでに、暑い盛りに4、5回は草取りをせねばならなかった。最初の草取りは指先をひっかく様な形にして素手で早苗に優しく、土を混ぜ空気と呼び込んであげるつもりで行う。

⑨「上げ草」で一応、草取りは終わるが、その後も穂に似た「稗」が出てくるので気を

付けて抜かねばならなかった。これが稲刈前まで続いた。

- ⑩田の土用干し：稲が育つ土用（7月）の頃には田の「土用干し」の為に田の水を抜き、田にひびが入る位にし、健康な根が水を求めて根を強く張るようにしてやる。土中に酸素も補給、根腐れを防ぐためでもある。一週間から十日の土用干しの後、再び水を入れる前に二回目の川さらえをした。

農作業に楽なものは一つもなかった。身体を休めるために毎日の「日のつり（昼寝）」は必需であった。

多くの農家は牛を飼っていた。牛は農作業の主な助っ人で無くてはならぬ貴重な存在で、大事に飼われていたが機械が使われだし牛は姿を消していった。（昭和28年頃）機械化以来、しんどい「草取り」作業は不要になり、農薬がその代わりをしてくれている。今では散布するだけでなく、機械植えと共に菓をその一株一株に植えこんでいけるらしい。

### ★農繁期の「田植休み」

農家の忙しい6月に数日間、子供も田植や家事を手伝えるように学校が休校になった。秋には「稲刈り休み」があった。昭和30年中頃まではあったように思うが、農業の機械化が進み、やがてこの休校はなくなった。

～（森・寺・私市）農家は茶摘み・田植と最も多忙な時期で、学校は小学校から四年制高校も含めて農繁期は休みになり、これは昭和40年頃まで続いた。

（農家でない子供も学校は休みで、別に仕事もないし、手伝わして下さいとも言えず、どこか「ずる休み」のような罪悪感を感じた事を記憶している。）

～（九州地方）同じく農繁期があり、児童は田植と、稲刈りの農繁期には公的に休んでも良かった。

### 12) ★稲荷講（住吉神社）

私部の住吉神社境内にある稲荷社の稲荷講は古くからある講だが、今迄5月に行われて

いたが、最近4月と10月の第4週目の日曜日に行うと決まった。稲荷社に赤飯、油揚げ等を供え、社の前で五穀豊穡と家内安全の祈願を行う。春には参加者に「私部稲荷大明神」と書かれたお札と神饌が授与され、秋は狐の顔を描いた絵馬と神饌授与及び抽選会もある。講中は5年前までは180軒はあったが、年々少なくなってきた。講の役員が講の会員から集金しお供えする。私部の稲荷社の御祭神は保食神（ウケモチノカミ）で食物の神様。宇迦之御魂神（ウカノミタマノカミ）と同一神とされる。

稲荷神社は全国に約3万社あるとされている。総本社は伏見稲荷大社。宇迦之御魂神を祀る。宇迦は「ウケ」（食物）の古語で穀物と農業の神様。「稲が生る」→「いなり」の神と呼ばれたが、菅原道真が「稲荷」の字を当てられそれが定着して「稲荷神社」となった。その神使眷属がお狐である。何故狐かと言うと狐は稲を荒らすネズミを退治してくれ又、尻尾が稲と似ているかららしい。そのうちに賢い狐が勢力を持ち、人々は「稲荷神」＝「きつね」と考え、次第に商業の守り神にもなる。農業から商業へ、農民だけでなく商人にも信仰され今に至る。

～星田の高岡山の高岡稲荷の講は今、消滅しかけている。高齢化で後継者がいないためである。

～狐に騙された話は交野にも日本国中にも多くある。こっくりさんも子供間に流行っていた。

### 13) ★母の日

5月第二日曜日：アメリカ合衆国のアンナ・ジャービスがその母の死を悼み、1908年5月に教会で追悼会を開き母の好きだった白いカーネーションを祭壇に飾り、皆に配り「母への感謝」の日を作ろうと訴え、1914年には連邦議会で5月の第2日曜日を母の日と定める法律が可決され、世界に広がっていった。日本では明治～大正時代にクリスチャンを中心に広がり今日に至る。

～～母のアンは牧師の娘で、夫ジャービスとの間に13人の子供がいたが育ったのは4人だけ。この1800年代は麻疹、腸チフスなどで多くの子供が死んでいた。彼女は劣悪な保健衛生状態を改善し、病氣

や乳児死亡率を減らすために「母の日労働クラブ」(Mother's Day Work Club)を立ち上げ、医薬品を配り貧しい家族を支援し教育し、生活改善に尽くす。日曜学校の教師を続け、南北戦争(1861-65)では南軍であったが敵味方なく負傷兵の看護を続けた。アメリカの女性と母親の地位向上の先駆けになる。アンは花が枯れても茎が何時までも花びらを散らさずに抱いているのが母の愛の姿だと、カーネーションが好きだったらしい～～。

アンナは自分が提案した「母の日」が花や贈り物で商業化していく事を非常に嫌い、商業化反対運動をして、生涯清貧に甘んじ、1948年施設で84才の生涯を閉じる。

古代ギリシャから母の日はある。神々の母リーアに感謝する春祭り。1600年頃の英国では「Mothering Sunday」があり、イースターの3週間前の日曜日に出嫁ぎに来ている人を母と過ごさせるために里帰りさせる。家族で母に感謝しラッパ水仙を贈りシムネルケーキを食べて祝う。オーストラリアでは菊(クリサンシマムとママが付くから)を、イタリアはアザレアの花、フランスは母の好物、韓国はお金等と送るものが違うらしい。

14) ★星田の慈光寺では「母の日」に慈母観世音菩薩前にて祈願法要を行う。観世音菩薩とは世の中の音を観られる、即ち私達の苦しみや悲しみの声(音)を全て聞き(観)て手を差し伸べて救って下さる菩薩様だから。

法要の後はコーラスや尺八の演奏もあり、楽しくみんなで歌い親睦を深める。

#### 15) ★「父の日」

6月第3日曜日：アメリカ合衆国のソノラ・ドッドが創始者。

～南北戦争で父ウィリアムが召集され、ソノラを含む6人の子供を母親が一人で育て、父が復員すると母は過労ですぐに亡くなり、父が男手一つで育てるが皆が成人するのを待ちかねたように亡くなる～。男手一つで自分たちを育ててくれた父を讃えて、1909年に牧師協会に歎願し「母の日」のように「父にも感謝する日」をと、父の誕生日の6月に礼拝をしてもらったことがきっかけと言われている。YMCAの青年たちが協力する。1916年にウイルソン大統領が認知し、1966年ジョンソン大統領が毎年の6月第3日曜日を「父の日」に定め、1972年に正式に制定される。父の日にはソノラに習いバラを贈る。

#### 16) ★蛍狩り

一昔前までは蛍は6月には交野の何処にでもいた。夕方になると幻想的なほのかな光を点滅させて頼りなげに飛んでいた。子供たちは枯れた菜種の枝と虫籠を持って、浴衣姿の親と「ほ、ほ、蛍来い～」と歌いながら、あの畔この畔と蛍を追った。家に帰れば蚊帳の中に蛍を放し共に寝て、自分も蛍になった夢を見た。田の消滅とともに蛍が消えて久しい。農薬の使用で減り、田の減少で減り、ヤゴから育てないと見られなくなった。日本独特の風物詩がまた一つ消えた。

～(星田) 南星台の方がボランティアで傍示川を清掃しヤゴを育て蛍を育てこられた。溪谷に飛び交う蛍はなんとも幻想的で、他所からも見に来られていました。一度大水ですべてが流されましたが、又復興して下さっています。

「もの思へば 澤の蛍も わが身より あくがれ出づる 魂かとぞ見る」 和泉式部

「思あれば 袖に蛍を つつみても いはばやものを とふ人はなし」 寂蓮法師

～(私部) 現在は向井田地区の住宅になっている所に水路があり、蛍が生息していた。付近の水は綺麗で蛍やヤゴが居り、時には家の前栽で蛍が飛び交う風景があった。前川沿い、天の川沿いで観られた。

#### 17) ★夏越の大祓え(磐船神社・機物神社・住吉神社・星田神社)

一年の半が過ぎた6月30日に行われる祓いの神事。

日本人の伝統的な考え方である「自らの心身の穢れや災厄の原因となる諸々の罪・過ちを祓い清める」為に、心を和やかにして平和を祈りつつ茅の輪をくぐる。

～茅の輪の由来は旅をしていた素戔鳴尊が一夜の宿を裕福な巨旦将来に頼むが断られ、貧乏な兄の蘇民将来が快く泊めてもてなしてくれた。尊はそのお礼に「これを腰につけておれば疫病から免れる」と茅の輪を授けた。その後疫病が流行し蘇民将来の家族は茅の輪を付けていて助かり、巨旦将来の一族は滅んだという。この故事から魔除けに茅の輪を腰に付けるようになり、それが茅の輪くぐりに発展していった。奈良時代から宮中行事として行われていたが、応仁の乱（1467～77）から中断し、明治から復活した。神歌を「水無月の夏越の祓えする人はちとせの命延ぶといふなり」と唱えながら左回り、右回り、左回りの順に八の字を描くように3回くぐり、正面で一礼して神前に進み参拝する。人の穢れを吸い取った茅の輪から茅を抜いて持ち帰ってはいけない。～

～お菓子の水無月：夏6月には貴族が楽しむように氷室から氷を宮中に届けていた。庶民は手が届かないので、白い外郎を氷に似た三角に作り、邪気払いの小豆を乗せて食べた。

～（私部）住吉神社にも又お宮への道筋が決まった場所にも提灯がある。

～（磐船神社）29日が「宵宮」で私市の氏子総代、区長、村人等が詣り茅の輪をくぐり祈祷を受ける。

30日は一般の参詣者が茅の輪をくぐり祈祷の神事を受ける日である。

## 18) ★半夏生

夏至（今年は6月21日）から数えて11日目頃、今年は7月1日頃から七夕までの間の事をさす。「半夏生以後は半作」と言われ、この日までに田植えを終わってれば豊作だが、残ってれば半作だと言う。ドクダミ科の烏柄杓＝半夏が生える次期なので「半夏生」と呼ぶ。このころの雨、「半夏雨」は大雨になりやすく、農家は田植休みを取り、牡丹餅を作り、蛸を食べてねぎらう。何故 蛸なのか？

～（私部）住吉神社では半夏生祭を行う。「ハゲッショ」と発音する。五穀豊穣を祈願して湯立て神事を行う。八つの釜にお塩、お洗米、お神酒を入れて煮だて、笹の葉で湯を救ってまき散らし、穢れを祓う神事。植え付け休みで、村内を鉦を打ち鳴らしてふれ回り歩く。

～（交野の各村）この日は蛸を食べた。何故蛸なのか？の答えは～「真蛸は疲労回復効果もあるが、田植の後の早苗が泥の中で、吸盤のある蛸の足が八方に吸い付くごとく、しっかりと根付くようにとの祈りを込めて食べられた」～。（女性部の会員が丁度、読売新聞のコラムにこの記事を見つけて当日持参くださった。関西一円にある習慣らしい）

## 19) その他：

### イ) 地区の神社仏閣の数

☆ 私部は住吉神社と光通寺・無量光寺・想善寺

☆ 郡津は郡津神社と明遍寺・極楽寺・（長宝寺跡）

☆ 倉治は機物神社と光明院・善通寺・宜春院

☆ 私市は磐船神社・天田神社・若宮神社と獅子窟寺・松宝寺・雲林寺・西念寺・実相院

☆ 森の神社は川東神社と浄土宗の須弥寺。（境内には観音さん お稲荷さん お大師さん（弘法大師）が祀られている）。森の浄土真宗の家は私部の無量光寺の檀家になっている。

☆ 傍示は菅原神社と八王子社・蓮華寺

☆ 寺村は住吉神社と八大龍王社・正行寺

☆ 星田は星田神社・妙見宮と慈光寺・光林寺・光明寺・星田寺・善林寺・小松寺・薬師寺

（茶話会で郡津地区は郡津神社の由来の話になったので、それも記します。）

昔 交野郡の「郡衙」が郡津にあり、名に津が付いている通りすぐ横まで海が来ており、そこで米の集荷をしており、「倉山」という小高い丘に蔵があった。そのため富裕な民が多く、

平安時代に長宝寺という立派な寺を寄進した。その中に郡津神社があり一宮で素戔鳴尊、二宮で住吉四神、三宮で天照大神が祀られていた。その後長宝寺が廃寺になり、明治時代の廃仏毀釈の時に神社統合が促され現代の郡津神社のみになった。長宝寺の名前は「長宝寺小学校」の学校の名前にのみ残っている。

- ロ) 各家の葬儀の際は檀家寺の僧侶が導師をされる。これは私市も私部も同じであるが、この二村では全寺より僧侶がお悔やみに参列される。参列して下さった僧侶にはお布施をお渡ししていた。
- ハ) 私市・私部は月に一度 同家（同じ家筋）が和装で集まり、永代経を上げていた。
- 二) 私市・森では不幸にして親よりも先に子供を亡くした逆事（さかごと）には親は白い袴姿で近所の辻に座って無念、お詫び、後悔を体現した。
- ホ) 私市・私部 葬儀における子供の役目として提灯を持ち僧侶をお迎えに行くことがあった。
- ヘ) 私部 土葬の時代の頃、棺を担ぐ人は冬でも素足で草鞋（わらじ）を履いて担いだ。野辺送りは北側のなんごの坂から行き、埋葬後は南側の上の道を帰った。担ぎ手はその上の所で草鞋を脱ぎ捨て、素足で帰った。
- ト) 子供を大切にする
  - ☆だんじり祭りや十日盆では子供が主役である。
  - ☆家父長制度だったので、長男は特に大事に育てられた。
- チ) 神棚について
 

明治初期の廃仏毀釈があったとはいえ、一般家庭では神棚とお仏壇がある。

仏式葬儀の際には神棚や陛下のお写真を半紙で覆った。これは神様が上位であるから。そして亡くなった人が浄土への道を迷うからと言われている。陛下のお写真を覆うのは庶民の仏事などをお見せするのは失礼であると考えたからかもしれない。
- チ) 梅酒・梅干し・ラッキョ漬け作り
 

6月に入ると、梅やラッキョを漬ける。しかし昔から「漬けた梅にカビが生えると不治（フジイル）、不幸や病が家内に入ってくる」と言われ土用干しするまでは特に気配りをした。この時期は農家にとって特に多忙期、その上に家内に心配事などがあるとついつい手の届きにくい事柄への戒めかな～～と昔の人の一言一言が心に響く。
- リ) 私市・森地区のまとめ
 

伝統行事は戦前までは比較的確かな形で続いていたが戦後生活様式の大きな変化にともない縮小廃止が進み守っていくことが困難になっている。今生きる私達もご先祖様と同じく暮らしの中で健康・長寿・繁栄・厄除けを熱望している。少しずつ形は変わっても続けていきたいと思う。
- ヌ) フェノロジーカレンダーと関係のない茶話会よもやま話

#### ～倉治地区茶話会

☆交野一円 昭和 30 年代～40 年代はロバのパン屋や紙芝居屋が来ていた。

☆枚方名物「河内素麺」～～江戸時代から農閑期の副業として枚方市津田や穂谷地域で引き継がれてきた。昭和初期には素麺を作っている農家が 70～80 軒あったらしいが、平成 24 年に最後の一軒が廃業した後も現代、藤井米穀店五代目の藤井繁雄さんが唯一、河内素麺づくりを継承している。

#### ☆戦時中の話

イ) ゼロ戦、グラマン機、B29 が飛んできた。

いきいきランドのドームフロアには太平洋戦争中に米軍機によって撃墜された旧日本陸軍戦闘機飛燕の残骸（エンジンプロペラ）が展示されている。2005 年星田北から出土した。

<昭和 20 年 7 月 9 日硫黄島から米軍機 P51 戦闘機 60 機が来襲、伊丹空港を出撃した飛燕（三式戦闘機）が迎え撃った。その時 中村純一中尉の機が撃墜され、落下傘で降下中に敵戦闘機の翼でロープを切断され水田に落下、戦死された。村人はご遺体を手厚く光林寺に運び丁



寧に安置して翌日に陸軍に引き渡した。戦後、鹿児島から中村中尉のご遺族が来られた。

駅前の鎮魂碑は駅前開発のためその近くに移動された。＞

令和 7 年 9 月 27 日の古文化同好会の歴史健康ウォークで山本秀雄講師が「星田の未来と歴史」で此処も陸軍専用鉄道跡も案内されました。文章はその時の資料から引用させて頂きました。

- ロ) 明治 29 年日本陸軍は今の中宮団地辺りに「禁野火薬庫」を設置し、その横に昭和 13 年に陸軍造兵廠枚方製造所が開設された。国鉄片町線（学研都市線）の津田駅から禁野火薬庫製造所まで、また星田駅からは昭和 16 年に香里製造所まで弾薬輸送用の鉄道引き込み線があった。昭和 14 年 3 月に禁野火薬庫の大爆発が起こり 94 名の方々が亡くなった。離れた星田でも窓ガラスが爆風で割れた程にひどい爆発であった。星田駅北から香里までその軍用道が残っていて、高野街道横のれんげ畑の中の長閑な一本道であったが最近の開発で跡形もなくなって、また一つ史跡が消えた。

- ハ) 茶話会参加者の戦時中の中国での話。

戦時中一家で中国に渡り、日本の軍人さんに御す漬物屋をしていた。中国人 20～30 人ほどを従業員にして大きな倉庫一杯に漬物を漬けていた。両親は中国に居て、同じく中国に出征していた大友柳太郎の付き人をしていたこともあった。